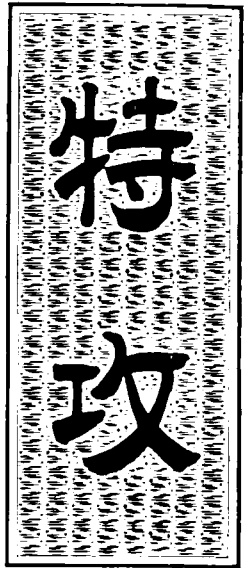


靖国の桜

# 第10回特攻隊合同慰霊祭

左記により今年も合同慰霊祭を執り行います。

- 一、日時 3月27日(日) 一三・〇〇
- 二、場所 慰霊祭 靖國神社 昇殿  
直会 靖国会館



## 第6号

〒102(新)  
東京都千代田区九段南  
4-3-7 勸信行社内  
特攻隊慰霊顕彰会  
特攻平和観音奉賛会  
電話 03(263)0851  
編集人 最上貞雄  
発行人 最上貞雄

### (第5号より再録)

昭和62年4月5日靖國神社に於て第9回特攻隊合同慰霊祭が厳肅の中に盛大に執り行われた。

慰霊祭に先だって、再興された遊就館に奉納した特別攻撃隊関係の諸史料、諸施設並びに同日より開催された特別攻撃隊写真展の清版式、除幕式が執り行われた。

当日は全くの好天に恵まれ絶好の花見日和となり社頭は大変な人出で、慰霊祭にもご遺族を始め五〇〇名を越す多勢の方々のお参りをいただいた。

- 一、遺書、遺影、遺品
- 二、特別攻撃隊の旗
- 三、特攻戦士の像
- 四、各種特攻出撃のレリーフ 四面
- 五、各種特攻兵器の模型
- 六、イリサン戦車特攻の立体模型
- 航空機 26機、舟艇 6隻

特攻展示室除幕



- 七、各種説明パネル
- 1、陸海軍航空特攻作戦図
- 2、陸海軍特攻兵力一覧表
- 3、陸海軍水上特攻隊配備図
- 4、水ぎわ特攻説明図
- 八、特攻関係書籍

拜殿に進んで修祓、献饌、祝詞奏上があり、続いて竹田会長より祭文が奏上された。靖國神社に於ける慰霊祭を厳肅の中に終了し、徒歩にて私学会館の直会会場に移動した。竹田会長の挨拶に続いてご遺族を代表してはるばる九州よりご参列下さった陸士56期入隊で比島で戦死された津留 洋様の兄上教様より御挨拶をいただいた。

先生の作製にかかわるものである。二階の特別企画展示室には毎日新聞社等多数の方々の協力を得て二〇〇点に及ぶ特別攻撃隊の写真パネルが展示され、参観者は思わず目頭を熱くした。参集所に於て竹田会長より神野藤権宮司に奉納品の目録と維持基金 金壹百万円の奉納が行われ、神社側より特攻隊慰霊顕彰会に感謝状が贈られた。

### 靖國神社、遊就館前

## 『母子の像』



吉田松陰

親を思う心にまさる親心

今日のおとづれ なんとときくらん

不詳

歌書よりも 軍書にかなし 吉野山

# 特攻平和観音

## 年次法要

62年の秋風さわやかな秋分の日9月23日世田谷観音寺特攻平和観音堂に於て浅草寺式室をお迎えして第36回特攻平和観音年次法要が厳修された。晴天にも恵まれご遺族も80名に及び四〇〇名を越すお拜者があつた。

今年の特攻平和観音堂前に御影石の台に銅板に刻まれた竹田恒徳本質会会長による日英両文の「特別攻撃隊の頌」が奉納された。

法要開始に先立ち、御前に於て式衆の読経があり、竹田会長と、7月逝去された奉賛会理事長丸田文雄様の末亡人綾子様によつて紅白のテープが引かれ幕は切つて落された。

真に立派な碑で外人二人が恰度来合せて英文の頌文を讀み入るよ様に感嘆して讀んで行った。早速に英文でも刻んだことが羨ましく思ふ。高ひの微笑がこぼれた。

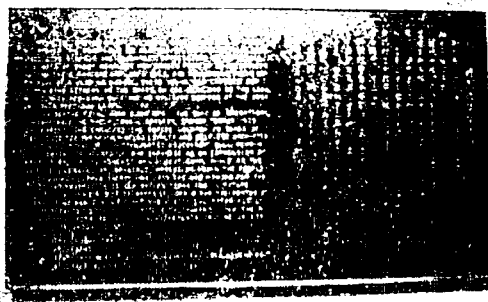
例年の通り丸田住職による山王原文、讀経と讀き、特攻平和観音奉賛会会長吉田恒徳様の祭文が莊重に奉読され参列者一同の胸を打つた。続いてご遺族代表、沖田花蔭藤山睦夫様の義兄武藤邦彦様、戦友代表特操会々長飯野謙二様の追悼の辭があり一同法時を偲び思はず眼頭を熱くした。

石橋一歌先生の献吟は佐伯電静先生の笛と相和し真に聞く者の肺腑をえぐる響きあり一同より嘆息がもれ、続いてテープ保存会による「國の眞実」では全く身の引締る思いがした。

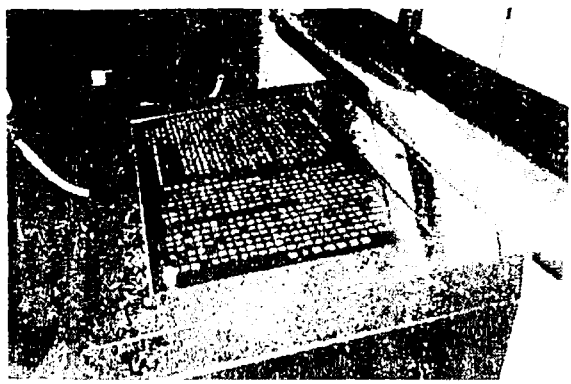
一同焼香が終り、池の中の特攻平和観音像の前にて式衆による読経があり厳肅の中にも盛大な法要が無事終了した。

直会に入るや、ビールと冷酒を城下を中心に法時を偲び談笑、合同に勇壯な各種軍隊ラッパが吹奏され、大宴なご中食に解散した。

思えばこの特攻平和観音像は海軍及川吉志郎大尉、高橋三吉大尉、陸軍は河辺正三大



特別攻撃隊の頌



(之は遊就館の「特別攻撃隊の頌」)



世田谷特攻観音「頌」除幕

最後の陸軍航空総軍司令官河辺正三大将と第六航空軍司令官菅原道大中将は、観音像一俵を陸軍航空特攻の最大の基地であつた鹿児島県知覧町にお祀りしたいと持参、特攻の母と慕われた鳥浜とめ様のご尽力により奉安されたのが知覧特攻平和観音で、こちらは毎年5月3日知覧町長が祭主となり全国より多数のご遺族、関係者が集り時には、〇〇〇名に及ぶお拜者があり立派にお祀りがされていす。特攻平和観音堂一帯は特攻平和公園として整備され境内に昨年末特攻平和会館が建設され、陸軍唯一の現存航空機「飛燕」が展示されその周りに沖繩で殉じた義烈空挺隊を始め航空特攻一、〇二六柱の遺影、遺品、遺品絵画その他種々の施設が展示され、戦争を知っている者は申すに及ばず、知らない若い世代の人々にも強い感銘を与えている。

### 知覧特攻平和観音堂表参道づくり

#### 石灯笼 寄進について

知覧町では、知覧特攻平和観音堂の参道の延長を推進中で、参道沿線に並列するもの及び境内に、一、〇二六基の石灯笼(高さ1.8米)を建立するため、寄進の公募を行つた。完成の予定は、昭和16年4月末となつてい

### 第32回知覧特攻慰霊祭

62年5月3日千二十六人の特攻隊員が出撃、散華した知覧特攻基地跡で、関係者約千人が参列して、しめやかに慰霊祭が行なわれた。

## 各地区、各隊の慰霊祭、法要

連浩先 千一〇三  
鹿児島県川辺郡知覧町郡六二〇四  
知覧特攻慰霊顕彰会  
電話09938-312511  
内線 2622

◎◎ (陸軍海上特攻機、L)

陸軍海上挺進隊慰霊大祭 江田島

合同慰霊 広島原爆救援隊被曝死者  
江田島幸ノ浦地区出身戦死者  
◎第一次特攻隊戦死者 一七四〇名  
62・10・11(日) 大祭は4年目毎  
小祭は中間2年目毎

広島県江田島町幸ノ浦地区海岸  
(江田島の北地区、似ノ島、広島宇品に面する地区)

参加者 二五六名(内御遺族 七〇名)  
当日宇品港より、フェリー船「第3えたじま丸」を借り切って江田島大須港に乘陸、幸

の浦海岸において、無宗教献花方式により慰霊祭が行われた。  
今回は特に、特攻隊慰霊顕彰会より、竹田会長の代理として、最上貞雄事務局長が参列され、会長の祭文を頂き、供花があった。

祭文

過ぐる大東亜戦争に於て、わが軍の勇戦敢闘にもかかわらず後半遂に祖国存亡の危機に立ち至りました。

この時にあたり、海上挺進戦隊の英霊皆様は、春秋に富む若き身を敢然として祖国に捧げられました。

敵艦に体当たり、護国の鬼となられた方々、又舟艇不足で陸上で敵に切込み散華された方或いは原爆被災の広島に基地より救援に向われ原爆後遺症で亡くなられた方、皆英霊は祖国を思うて殉ぜられた方々で、海に肺腑をえぐられる想いでございます。



62.10.11江田島、幸の浦海岸にて  
●慰霊祭で竹田会長祭文を代読する最上事務局長

然しこれら諸英霊のご加護で祖国日本も今日の平和と繁栄をもたらすことが出来ました。本日第六回幸の浦慰霊大祭に当り、ご遺族はじめ、かつての戦友有志相集い、在天の英霊に悲しく敬弔の誠を捧げる次第でございます。

希くば英霊安らかにお休みをさせていただきます。  
昭和六十二年十月十一日  
特攻隊慰霊顕彰会  
会長 竹田 恒 徳

終つて、宇品港に向うフェリー船「第3えたじま丸」車輛甲板に、キャンバスを敷き、軍歌をまじえて、海を征き、戦野に、原爆に散つた戦友の面影を偲んだ。(吉田浩次記)

(海軍豊洋、西)  
特攻殉国の碑保存会  
慰霊祭(小祭)

63・5・15(日) 大祭は5年目毎  
長崎県西彼杵郡西彼杵町小串郷  
参加 約450名

(特操会 1~4期生)  
特別操縦見習士官之碑  
京都 頒徳祭

62・10・11(日)  
京都市東山区清閑寺雲山町1

雲山護国神社境内に於て行われ、220名の方が参列された。  
頒徳祭は、隔年毎とし、次回は、64年となります。  
(佐藤修一記)

鹿屋 慰霊祭

62・4・  
毎年 4月第1~第2 日曜日  
主催 鹿屋市長(民政部社会課民政係)

都城 慰霊祭

63・4・6(水)  
毎年 4月6日  
秋山副会長参列

万世 慰霊祭

63・4・10(日)  
毎年 4月第2日曜

(陸軍船舶特別幹部候補生、1~4期生)  
「若潮の塔」慰霊大祭  
小豆島、土ノ庄

63・10・10 大祭は5年目毎  
香川県小豆郡土庄町(田瀬崎村)  
昭19・4・1 入隊した船舶特別幹部候補生の第1期生1、890名の大半の1、718名が、入隊後僅か5ヵ月後の8月末から特攻隊員として編成され、比島、神龍、台湾に出戦、1、144名が戦死された。

昭和20年更に第2次編成には、2期生1900名中の1200名、3期生2132名中の1300名が、◎特攻隊員となった。  
昭和20・8・原爆投下された広島での戦死者(3・4期生)、更にいち早く江田島、其他より舟艇にて出勤、救援活動に従事した為、原爆症に侵され死亡した方、現在も後遺症に悩まされている方も多数居られる。  
(吉田浩次記)

尾翼の富士山

飯田佐次郎

昭和十九年十一月十三日第西尾常三郎少佐は特別攻撃隊富嶽隊長として、比島東方海面の敵艦に突入戦死したのでした。弟を失った悲しみは大きかったです。敵艦に体当たり攻撃で一命を国に捧げたことに感激して、富嶽隊と云う隊名にも又深い感銘を覚えさせました。それから間も無い十一月二十九日付の写真週刊に、兵隊さんが尾翼に富士山を出している写真が表紙になっていました。これを見た瞬間富嶽隊の特攻機の写真に相違ないと思えました。あの富嶽隊の特攻機の尾翼に富士

山を書いているのは誰かしら、又あの隊員は手紙を頂きました。その中に、「富嶽隊のマークは幸保が自分で考えて書いたもので、激しい戦争中の事で調べる手立が無いので新聞切抜帳に入れておきました。丁度その頃新聞販売店にも週報と同じ写真が店頭に掲示されておりましたので、これも頂きまして大事に仕舞いました。」

終戦後も三十五年すぎた昭和五十五年の秋、第三十一飛行場大隊と富嶽隊の合同慰霊祭の日、富嶽隊の生存者森山様にはじめて会いましたので、私は富嶽隊特攻機の尾翼に富嶽隊を書いたのは誰だったのでしょうかと聞きまして、

「ああ、あれは幸保曹長が書いたのですよ。彼は総もともうまいけど、字も大変上手で、私は家の標札を書いて貰いました。」との事でした。

戦争中から気になっていた、あの尾翼の富嶽隊を書いたのは幸保曹長とわかりました。幸保曹長は十一月十五日敵艦突入壮烈な戦死を遂げたのでした。

幸保曹長のお兄様に写真をお送りして、皆さんの戦地の元気な姿を偲んで頂こうと思っただけですが、さてその写真を何処へしまったのか忘れて見付からないので、切抜帳に入れておいた写真週報の表紙をお送りしました。それからあとで、弟の遺品等の整理をしてい

たら仕舞い忘れていた幸保曹長の写真が行方不明の中から出てきましたので、早速鏡子のお兄様の処へお送りしました。大変に喜ばれまして、先にお送りした週報の表紙はお返し下さ

いました。今年の七月中旬頃でした。富嶽隊の生存者

手紙を頂きました。その中に、「富嶽隊のマークは幸保が自分で考えて書いたものです。隊長の命令で書いたものでなく、全く自分一人で書き始めた時、私は「上手に書くのがお前は地方で看板屋をやっていたのか」と聞きましてら笑って答えませんでした。書くのを見てると素人はなれした立派なプロと見受けました。あの凶案の発想なんか裏に見事です。富嶽隊の富士山に稲妻を配し、特別攻撃隊の頭文字トを書き百番じや少いから、敵に教多くある様に見える為三番から順次番号を入れたのも幸保の独創でした。20号は隊長機で、私は3号機でした。」と書いてありました。

先年靖国神社遊就館が改装されて開館の前に、遺品奉納のお話がありましたので、弟の遺品の勲章、写真、等と一緒に写真週報も奉納致しました。廻報の尾翼の富士山は遊就館に入る度に、廻報の尾翼の富士山の表紙を見ると懐しく思いますし、書いている勇士が幸保曹長とわかって、本当によかつたと思っております。

比島リンガエンに於けるレの死闘 斉藤 義雄 (44期)

昭和二十年一月十日比島リンガエン湾に於て陸軍水上特攻隊が倭攻を奏したとの同盟報を、大本營の某参謀は当日の日記に「我が敵の輸送船二十数隻を撃沈したと云う同盟報があったが公報はない。リンガエンに配置した艦が百隻が果してそんな成果を挙げたのかお

管で呼称していたのと偽のことであります。この同盟報は一月九日の夜、正確には一月十日の午前二時過ぎから午前五時頃までの間に暗黒のリンガエン湾で繰り広げられた陸軍海上挺進第十二戦隊の死闘を陸上から望見した火柱や爆発音によって判断した情報に基づき報道であったのです。出撃した隊員のうち、二名が人事不省のまま米軍に収容された以外(一名は直後死亡)全員が壮烈な戦死を遂げましたので暗夜の海上で演ぜられた死闘の状況も正確な戦果も不明のままでありました。

特攻隊に関する著書は多数ありますが、昭和三十六、七年頃、米側側の資料を詳細に調査して報告した外国人による著書が相次いで出版されました。オーストラリアのウオーナ夫妻著、妹尾作太男訳の「神風」はその一冊であります。この上巻三五頁から三二九頁に亘って記述されている部分はリンガエン湾に於ける海上挺進第十二戦隊の死闘を敵側から見た貴重な記録であります。又英国の歴史作家リチャード・オ・ネール氏著の「神風 SUICIDE-SQUADS」の一冊は教範通りの攻撃を実行した。船尾から約二頁から一〇五頁に亘って同様の報告が記述されており、この本では「marru」と表現しております。前者は既に訳本として紹介しておりますので、ここではオ・ネール氏の記録を抽出して紹介いたします。

戒していた。併し重大な脅威が海から来襲しようとしていたのである。日本帝國陸軍の高橋大尉は、最初で最も有効な規模な海上特攻を開始しようとして準備していたのである。

一月十日〇三〇〇前にリンガエン海岸の西北約六マイルのスワルから出撃した。彼等はエンジンに低速にし護衛網を避けながら同盟軍の泊地に接近した。最初の警報は駆逐艦フィリップスのレーダーから発せられた。

時に〇三三〇、飛行機にしては小さすぎる三箇の映像がレーダーに映し出された記録されている。その夜は肉眼で見張ることが出来な程暗かったが、星明りの中に沢山の小さなボートが発見された。〇のバイロット達は速度をあげて突進して来た。

〇三五三戦艦コロラドがLST九二五(一六二五ト)からの救援信号を傍受した。曰く「敵の水雷艇により損害を受けた。浸水している。救援艇頼む」と。

少くとも三隻の〇がLST九二五の舷側に爆雷を投下したのだ。船の水線下に穴をあけられ右舷機関を破壊された。この三隻のボートは教範通りの攻撃を実行した。船尾から約二十ノットで来て、一隻は左舷へ一隻は右舷へ、そして一隻は後方から船の後部を破壊す

る為に、水中爆雷を投下した。併し〇の大部分は目標の水線下で直接水中爆雷が破裂するように直進衝突の攻撃を実施した。このような攻撃は、LST一〇二八に對しても実施され爆発で船底に穴があき、機

を放棄しよう命令を發した。ウォーホーク船が破損していた。横腹に十二フィートの損傷を受け七十三名の死傷者を出したが、まだ沈没してはいなかった。

米海軍は南フリッピンから、パトリールボートの北方展開を速かに実施すること、泊地防衛の強化を要請した。

〇四〇〇過ぎ水雷ボートによる攻撃警報が同盟軍艦船団全部に出された。時に駆逐艦イリッパは突撃コースに入っている④を免れ、二〇ミリ火力によって僅か二十五ヤードの距離で爆発させて、辛うじて被害を免かれた。同盟軍船団の泊地は混乱していたので退避行動の操船が阻害され、同士討ちの危険がある。同土討ちの危険がなからなかった。其の他多数の兵が同じような状況の下で殺された。捕虜になるよりも自決を選んだ日本兵の救援に対する抵抗は、新

〇四四五の間に④の一团と交戦したが、五ノット以上で行動することは出来なかった。小さな舟があまりに近距離に肉迫して来たので、軽自動火器でしか集中火力を注ぐことが出来なかった。攻撃は撃退されたがロビンソンは④から受けた軽傷には堪えたものの狭い泊地での味方の砲火によって破壊されてしまった。この時までは、全般警報は水雷艇特攻ボートと同様に、豆潜水艇や自殺遊泳者を含むように拡大されていた。

〇五〇〇迄には④は引き揚げていた。(原文のまま)。彼等は重大損害を受けた。約四十五隻のボートを失い、第十二戦隊はこれ以上、作戦行動は取れなかったであろう。

海軍視察者から報告された爆発に基づく日本の情報には二〇〇〇隻の米船舶が沈没又は損害を受けたと主張している。実際既に話に出た船は別として、LCI九七四、LCI三六五は沈没していた。LST六一〇とLST九二五は、本当に破損していた。更に七隻の

湾を横断してスワルに移転。二十年一月四日、保有舟艇の配置を完了したので。一月六日から米軍の烈しい艦砲射撃を受け、多くの人員と舟艇を失いました。一月九日米軍の一部が上陸し拠点を設定した当夜、第二十三師団(旭兵団)師団長西山福太郎中将(二十四期)の出撃命令を受け一月十日(三〇〇)積前基地を出発して敵泊地に向った。出撃舟艇の数は正確には分かりませんが、四十隻乃至五十隻とも見られております。一艇に二・三名が乗って出撃したのもあつたのであります。既に負傷していたのに

当夜は星明りだけの暗夜で相当の波があつたと報告されております。オ・ネール氏の著書で述べられている死闘が方々で演じられた戦闘について、その真相を明らかにすること不可能であります。私達はオ・ネール氏の報告により全般を想像するほかにあつません。出撃戦死された勇士達の年齢は幹部を含め平均十九歳余であり中に十六歳の黒木幸夫氏、十七歳の中元勇氏、十八歳の辻治雄、大久保寅彦、海老瀬英治の諸氏も含まれておりました。総て船舶特幹の一期生であります。この少年達が短期の訓練しか受けていなかったにも拘らずよくもあのような戦いを遂行したのだと唯々頭の下がる思いがいたしました。貴公子高橋戦隊長の指揮も真に見事でありました。艇を沈められて海に浮んでいた隊員の開魂には米軍兵士も胸を打たれたに相違ありません。

ここで忘れてならないのは第十二戦隊の後継となり、その基地業務を担当した海上艇進基地第十二大隊の存在であります。この大隊は昭和十九年九月中旬、甲府の近衛歩兵第四連隊補充隊で編成された立川武喜少佐(少佐十八期)を長とする約九百名の部隊であります。戦隊の出撃直前に基地の移動を命ぜられたにも拘らず、よく新設の基地を整備し大きな損害を受けながらも第十二戦隊の出撃を支援してその出撃を成功させた後は陸上戦闘に参加して殆んど全滅に近い損害を出して消滅付記

一、ウォーホーク夫妻著妹尾作太男訳の「神風」上巻の巻頭にある写真の中に「海軍の特攻小型ボート霞洋(リンガエン湾の海岸にて)」と説明されている写真があります。この艇は明らかに陸軍の④であり「ユ一七」の番号から判断して第十二戦隊第一中隊所屬の④と推定されます。この艇の艇首には触角の金具が付けてあり、衝突攻撃を可能にする構造になっていることに注目することが大切です。

二、リンガエンで戦果を挙げた④の勇士達は昭和五十三年九月二十三日初めて特攻平和観音に追加合祀されましたが、公式には特攻戦死の取扱いは受けておりません。

三、LSTは戦車揚陸艇で一六二五トンのLCIは歩兵揚陸艇で二四六トンの(本稿・④江田島・顕彰会報②と同文)

### 海軍航空特攻の追想

鈴木瞭五郎(海兵68期)

大東亜戦争における海軍の航空特攻は昭和

十九年十月二十五日開行海軍大尉率いる神勢連転をねらう比島海空戦は有利に展開でき、  
 風特別攻撃隊敷島隊(零戦四機)によるレイヨリ。  
 へと追い詰められてゆき、そこには敗退と消滅がしいられていった。わが攻撃第四〇五飛

テ東方敵空母部隊の奇襲成功に始まり、昭和二十年八月十五日第五航空艦隊司令長官宇垣  
 飛隊には練度の低い者が多く、通常戦法  
 飛行隊による攻撃は成功困難であつて大死となる艦隊の配下にあつた。一カ年以上の練成訓練

海軍中將搭乗、中津留達雄海軍大尉率いる  
 による攻撃は成功困難であつて大死となる艦隊の配下にあつた。一カ年以上の練成訓練  
 如何に心理的、自然的かつ技術的可能性の

母星特攻隊(十一機)による神風周辺敵艦船  
 による攻撃は成功困難であつて大死となる艦隊の配下にあつた。一カ年以上の練成訓練  
 如何に心理的、自然的かつ技術的可能性の

攻撃の自決行と神風特攻隊搭乗大西海軍中將  
 により必成必死の機会を与えたい。自分は比  
 とが期待され、私どももそれを目標としてい

の自決により終つた。思えば、この間わずか  
 島を死場所と決めており、いづれ若い諸君の  
 たが半年にして未熟のまま、台湾神航空戦次

一年足らずのことであるが、何と長い時間  
 後を追う覚悟である」といふ。私はこの突然  
 いで比島航空戦へと駆り出され、最後は特攻

もに海兵七上期であり、かつまた、ともに艦  
 の任命式に驚きかつ疑問を打ち消すことがで  
 部隊として比島戦場に消滅した。昭和二十年

操縦縦出身である。しかし、関大尉は零戦、  
 きなかつた。銀河特攻の成功度や如何に?  
 二月初頭、生き残り搭乗員を連れて木更津基

中津留大尉は本職の艦爆母星で見事な最期を  
 早速指揮官たる私は銀河を飛ばしてテスト三  
 地に掃投した私は横須賀航空隊勤務となり、

飾つた。私は縁あって彼等の飛行学生教官と  
 回を試みた。双発で三〇〇ノットを急降下で  
 銀河の戦闘史の編さんに従事したが、三月に

して霞浦(練習機)、宇佐(艦爆操縦)と起  
 きる。銀河はどうしても体当り直前の位置で  
 入つて攻撃第五〇一飛行隊長(銀河)となり、

居を併にした問柄であり、年を経るにつれて  
 は機首上げの傾向が生じ、渾身の力でこれを  
 南九州鹿屋基地次いで宮崎基地で神風作戦を

惜別の情はつるのみである。  
 制御していても体当りは不可能であることが  
 戦つた。このときは陸軍飛行第七戦隊、第九

関大尉が神風特攻隊となつた前後の頃、私  
 わかつた。低降下角の低速で突入すれば敵機  
 十八戦隊(ともに飛竜)と同一配下で敵機動

は攻撃第四〇五飛行隊(銀河)にあつて、近  
 闘機や防砲火の餌食となり易い。また、体  
 部隊攻撃や沖繩周辺艦船攻撃、基地攻撃に従

傍のルソン島最大のクラーク航空基地に展開  
 当り可能な位置まで肉迫できれば、爆弾を落  
 事し、連日の激烈な作戦を繰り返した。主と

していた。彼が戦闘機に移り、近くにいら  
 した方が命中率高いとも考えられる。銀河  
 して夜間の雷爆撃である。私の着任当初はわ

昭和19年末頃、第6航空軍は義烈空挺隊によ  
 る、サイパン島攻撃を決意し、編制をした。  
 昭20・4・1米軍が沖繩本島に上陸、彼我

の血戦の続く中で、説谷(北)、嘉手納(南)  
 飛行場が占領されてしまつた為航空特攻の実  
 施に支障ありとする大本営、6航空軍は、一

時的でもと両飛行場の制圧を計つた。  
 使用機は、当時浜松で、夜間低空飛行の猛  
 訓練をしていた、第3独立飛行隊の「重II

型」機であつた。  
 20・5・24健康(熊本)飛行場を築ち、沖  
 繩の飛行場に進入着陸した。阿修羅の如き活

躍が、翌々日まで飛行場の機能を奪つたので  
 ある。  
 第3独立飛行隊員に確か特操出身者が参加

ある。

沖繩に突入した義烈空挺隊と  
 共に散華した特操一・三期生

佐藤 修一(特操一期)  
 (熊谷・館林出身)

したと62年5月初旬ある酒席で海軍予備学生 見習士官(特操三期生)と太刀洗陸軍飛行学 校の基本課程を卒えた特別幹部候補生(特幹 13期生出身者より聞き、早速戦死者を調査の ところ「少尉酒井敏夫」とあり、出身は今迄 操縦一期生)の一部について操縦教育を施す どの戦記をみても記載されず不明でした。特 操一期生名簿には生存者として記載されて居 ましたが、日本本土の物資欠乏は覆うべくもな 調査の結果、知覧町役場調査の知覧参加名 簿よりご遺族が判明しました。62年9月23日 ール燃料の添加、練習機の特攻改装など昭和 特攻世田谷親善法要日にお招き致し、相模教 二十一年に入ってから戦局の深刻さが身をも 育隊時代同じ教育隊だった、宮田正晴君、田 て感じられるようになった。そして未熟練者 の教育では切迫した情勢に間に合わなくな 中耕三郎君及び助教でもあった64戦隊出身の たためか、三月には飛行訓練中止となった。 准尉安田義人氏も同席されて間違いないと確 代つて練度の高い教官・助教および特操三期 認がされ、歴史的とも言えるご遺族との対面 生の一部による特攻隊の本編成があり、模擬 下命があったとのことである。混乱を重ねた 特操一期 少尉酒井敏夫 飯坂田根、三教 爆弾を装着して重荷車での離着陸や急降下操 満州国内でも終戦後に当事者の手記などから 方特攻編成に漏れた教官、助教の大部分につ 撃などの特攻訓練が続けられていた。その一 判明したことであるが、南満の鞍山に在った 防空戦隊は内蒙古平原を南下して来るソ連戦 車群に向けて十二日以来連日攻撃を加えてい 以上二つの戦車隊は同一か別個のものかは定 二遺族 斎藤 高橋キキ様外

千回豊高区駒込3-15-12  
又四式重(機長、杉森秀男大尉・55歳)に いても未修得技術の再教育ということと同様 の訓練が南満州各地の飛行場で行われていた たのである。このなかには皇新教育隊での教 隊と命名されて既に内地に移駐を完了してい 官であった石切山小尉(少佐24期) 大野少 隊員はこの状況下にも勝利を信じて疑わず、 六月に九州南の基地から沖縄周辺海上に特攻 が混乱したが、この部隊の整備隊長から「燃 出撃している。さらにその後航空総軍は第二 料気化器をアルコール用からガソリン用に特 つぎに明るみにできたのである。この日本 航空軍に対して三百数十戦隊にのぼる特攻隊編 えない限りウラジオまでの飛行は不可能」と 最後の、そして又ソ連軍に対して唯一の飛行 成を命じたことが記録に残されている。実戦 の意見具申があつて危うく断念されたこの 機による特攻攻撃は戦後処理のなかで正当な 部隊の殆んどを南方に転出させた在満の陸軍 とである。しかしその後の取捨は困難を極め 特攻戦死と認められることもなく、終戦の混 乱による集団自決事件として処理された模様 航空部隊としては、教育飛行部隊の大部分を たことがつたえられている。 時に特攻隊とは少しも特別の部隊でなく操縦 教育を受けた若全員が特攻要員であるとの感 隊の一つがあつた大虎山の飛行場から錦州の

が強かつたのである。隊長(半年前まで我々 本隊に集結する目的で発進した十機の九七式 の教官をして学徒出身の少尉(特操一期)を 戦闘機が離陸後に機首を北方に向けたまま消 主とする人達が多く、隊員には通信省航空機 息を絶ってしまったのである。操縦していた 乗員養成所出身の召集下士官や少年飛行兵出 のは大部分が特操一期の若い将校たちであつ た。

が大部分をしめたほ 身者(十四期・十五期)が大部分をしめたほ 隊に集結する目的で発進した十機の九七式 戦闘機が離陸後に機首を北方に向けたまま消 息を絶ってしまったのである。操縦していた 乗員養成所出身の召集下士官や少年飛行兵出 のは大部分が特操一期の若い将校たちであつ た。

この十人の将校たちの周囲にいた人達の証 言によると、その数日間の言動から明らかに 自主的な特攻作戦を企図していた節がある。 同行した二宮准尉(静岡出身)が数日前の偵 察飛行で内蒙古の赤峰付近を一路南下するソ 連戦車群を確認報告しているし、同じ頃避難 途中の邦人老幼婦女子の集団がソ連戦車隊の 包圍攻撃をうけ、千二百人以上の死者を出し た葛根喇事件(八月十七日)は大虎山鎮の北 方約百五十軒の地点であると思われるところ からこの情報も入手していたと推定される。

以上二つの戦車隊は同一か別個のものかは定 かでないが、目標をこれらに設定して突入目 標を遂げたことが確実視されるにいたつたの 以上二つの戦車隊は同一か別個のものかは定 かでないが、目標をこれらに設定して突入目 標を遂げたことが確実視されるにいたつたの

### 終戦秘話

鈴木 孝(航空特幹一期生)

太平洋戦争の末期、昭和十九年の夏頃から 終戦時まで田満州四に第一練習飛行団(のち に第五練習飛行隊に改編)の教育隊が展開さ れていた。

この部隊の主力は仙台陸軍飛行学校から分 離独立したもので、同校に入校した特別操縦 教育を受けた若全員が特攻要員であるとの感 隊の一つがあつた大虎山の飛行場から錦州の (8頁3段目に続く)

通算収支計算書

千代田区慰霊堂運営委員会

自昭和56年4月1日  
至昭和62年12月31日

科目	金額	
	円	円
収入の部		
1 顕彰・基金収入	55,480,826	
2 石灯籠寄進基金収入	3,350,439	
3 慰霊祭会費収入	7,596,500	
3 月例会費収入	813,500	
4 受取利息	4,477,933	
5 雑収入	466,035	
収入の部合計		(72,185,233)
支出の部		
1 基金金費用	5,074,388	
2 慰霊祭費用	11,700,540	
3 月例会費用	1,808,776	
4 貸借料	205,400	
5 雑費	1,056,700	
6 図書費	19,740	
7 諸税公費	635,240	
支出の部合計		(20,500,784)
通算収支差額		51,684,449

算金開始は、56年 8月

貸借支戻表

千代田区慰霊堂運営委員会

昭和62年12月31日

科目	金額	科目		金額
		円	円	
資産の部		負債の部		
現金	53,269			
普通預金	3,948,682			
(三菱市ヶ谷)	(19,028)			
(一勧四ツ谷)	(9,947)	計		
(一勧市ヶ谷)	(3,912,561)			
(富士市ヶ谷)	(7,146)			
定期預金	13,741,492	正味財産の部		
(三菱市ヶ谷)	(1,179,872)	前期繰越残高	50,495,283	
(一勧市ヶ谷)	(12,561,620)	当期収支差額	1,189,166	
郵便貯蓄	229,690	次期繰越残高	51,684,449	
(東京4-59580)				
割引債	3,040,885			
野村証券				
中期国債	6,246,582			
野村証券				
模倣・備品	24,424,470			
合計	51,684,449	合計	51,684,449	

以上のとおり報告します。

昭和62年12月31日

千代田区慰霊堂運営委員会

(財) 借行社案内図  
千代田区九段南4-3-7  
電話 03-263-0851



新住所 〒102 千代田区九段南4-3-7  
電話 03-263-0851 (不変)  
ファックス 03-263-0853

借行社 移転のお知らせ

当会の事務局が在る 借行社 は、左記に  
移転しました。

(7頁より続き)  
伝え聞いた特操一期生を中心とする方々は、  
非運の同期生たちは勿論御遺族の心情を慰め  
るために顕彰会をつくり毎年供養を続けて来  
たのである。昭和四十二年からは五千余の陸  
海軍特攻戦死者をまつる特攻観音堂で知られ  
ていた東京世田ヶ谷の観音寺境内に慰霊碑を  
建て命日に近い八月中旬には慰霊祭を行って  
来たのであるが、現在はそれを知った教え子  
とも言える特操三期や特幹一期それに部隊関  
係者も全国から集って慰霊法義が続けられて  
いるのである。

御知らせ

故丸田文雄理事長の逝去(62・7・22)に  
伴い、後任に  
理事長 鈴木瞭五郎氏(海兵68期)  
副理事長 最上 貞雄氏(陸士54期)  
兼事務局長

特別攻撃隊総覧(仮称) 編集  
の作業が始められました

大東亜戦において行なわれた特攻作戦の全  
貌を明らかにし、戦没特攻隊員の慰霊顕彰に  
資するため、統一制のある総覧(仮称)を顕  
彰会として編集することになり、編集委員会  
を設け、62年10月より作業が始まりました。  
大別して

- ① 特別攻撃隊の戦闘の経緯
  - ② 特攻戦死者芳名録の作成
  - ③ 特攻慰霊顕彰施設の記録 となります。
- 記述は簡潔にし、全般を読み通し易いもの  
にする。  
完成迄に約3カ年を予定しています。皆様  
の御協力をお願い致します。

編集 集 後 記

今回は①の吉田浩次が、最上局長のお手伝  
いをしました。写真は上田恵之助、今井理  
一、竹内功氏の方々に御協力願いました。  
沢山の原稿を頂きましたが、長文のものや  
いろいろの御投稿もあり、予定紙数を大幅に  
超えたため、一部カットしたり、求号に廻さ  
ざるを得ないものが大分出ました。不恵